

編集後記

私が博士課程の大学院生の頃、戦前の中学校作業科の教員養成について調査するために、東京高等師範学校図画手工専修科の卒業生の生存者を訪問し、聞き取り調査を行ったことがあった。当時の卒業生は、師範学校（戦後は国立大学教育学部）の教員となった人が多かったが、その調査の中で、国立大学教育学部で絵画を教えていた元教授の方から、1930年代に発行された作業科関係の本とともに細谷俊夫『技術教育』（1944年）を寄贈していただいた（これらの本は、現在名古屋大学教育学部技術教育学研究室に保管してある）。当時の私は、教員養成学部で絵画を教えていた先生がこのような本を勉強されていた事実に驚いた記憶がある。本号で冒頭に掲載した斎藤暁子氏の論文は、氏が私の論文（「手工科成立過程期における日本とスウェーデンとの教育交流—手工科に与えたスロイドの影響の再評価—」『名古屋大学教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第50巻第2号(2003)年度）を読んで、私の研究室を訪問してくださり、工作（科）教育の歴史をめぐる研究交流から掲載することになったものである。美術教育史の観点から工作科教育史を研究している斎藤さんとの出会いは、数十年前の私の記憶をふたたび呼び起こした。同じく工作教育を扱った松本論文では、近年改定された小学校学習指導要領（の解説）の図画工作科における小さな変化とその教科書における反映を鋭くとらえ、そこを手掛かりに技術教育としての工作教育を、現場からつくりあげていく可能性を示唆した、重要な問題提起がなされている。

2012年5月、私は沼口博教授（大東文化大学）とスウェーデンのストックホルム大学が主催した職業教育・訓練に関する国際会議に参加した。会議はストックホルムからオランダに向かう船の中とオランダのホテルで行われたが、本号に掲載した3本の英語の論文は、その会議でなされた報告の一部である。北欧の職業教育・訓練についての共同研究を進めていくために、2012年8月にルンド大学（スウェーデン）で第2回日瑞職業教育・訓練シンポジウムを開催した。このシンポジウムに日本から5名の研究者が参加された。今後の共同研究の発展が期待される。

ルンド大学側の責任者であったアンダーシュ・ニルソン教授は、2012同年9月より3ヶ月間名古屋大学教育学部において客員教授として滞在している。この間に、私はニルソン教授とともに造船所における「工場学校」の設立過程を三菱長崎造船所とスウェーデンのコックム造船所を例に日瑞比較研究をおこない、日本産業教育学会第53回大会（金沢大学）で報告した。

アイスランドの研究者であるギスリ氏は、私が15年前に初めてアイスランドを訪問した時からの知り合いで、アイスランド教育大学で工作科教授法を担当していたが、当時ギスリ氏が工作教育からテクノロジー・エデュケーションへの発展を試みていたことを思い出す。アイスランドでも工作教育はある時期に美術教育的な色彩を強く帯びたものに変化していたが、氏がそれを変えようと奮闘していた様子をうかがうことができた。人口が30万人に満たない国ではあるが、独自の言語を維持している事実に圧倒された記憶とともに、アイスランドという名前が示すような自然の厳しさと共存しようとする人々の生活の営みに驚愕した記憶がある。

本号には、ロシアの研究者からの論文を3本掲載した。2011年12月にモスクワ教育大学で開催された技術教育に関する国際会議で知り合った、クルプスカヤ氏（Крупская）の論文は「テクノロジー（技術）科への文化的アプローチ」と題するもので、今回は翻訳を掲載することはできなかった。他の2つの論文は、ロシア語と英語で投稿していただいたもので、内容は同じものである。ロシア語を日本語に翻訳する余裕がないので、その英訳でご容赦いただければ幸いである。